

硫黄山に抱かれて



←麓のレストハウス「硫黄山MOKMOK（モクモク）ベース」には硫黄山がドラマチックに見える「MOKMOKシアター」や、硫黄採掘史と自然が学べる展示学習スペース「硫黄山ミュージアム」がある。

川湯温泉、再生への挑戦

1,500個以上の噴気孔から激しく噴煙を上げる硫黄山（アトサヌプリ）。弟子屈町にある川湯温泉の源として、国内屈指の強酸性の湯を湧き上がらせ、全ての湯宿に「源泉かけ流し」の恩恵をもたらしている。5月半ばに咲く固有種のカワユエンレイソウ、6月中旬に大群落が開花のピークを迎えるイソツツジも、硫黄山と関係が深い。硫黄山の恵みと、その恵みを生かして温泉街を再生する挑戦を追った。

国立公園が連なる鉄路

釧網本線の上り列車が、遠矢駅を過ぎ、日本最大の湿原、釧路湿原国立公園へと入って行く。乗車した三月は、ベージュ色の枯れ野にエゾシカやタンチョウが見えた。厳しい冬を生き抜いた野生の命は、神々しいほど美しい。列車は、釧路川の大きな屈曲部をのぞきこむように走る。達古武湖、塘路湖、シラルトロ沼と、次々に現れる湖沼。視界のどこにも人工物が入らない風景に、目が、心が、洗われていく。摩周駅で、右に摩周カルデラ、左に屈斜路カルデラを成す山々が大きく迫ると、阿寒摩周国立公園に突入した合図だ。国立公園から次の国立公園へ。釧網本線は自然の宝庫だ。その先は、知床世界自然遺産、知床国立公園の知床連山を遠望しながらオホーツク海に出会う。冬は流水が着岸し、夏は海浜草原の花々を愛でる臨時の原生花園駅も開く。湿原、野生動物、火山、流水、花。釧網本線は、多彩でダイナミックな自然の真ただ中を疾走している。

（写真上）硫黄山は標高508m。数百年前に山頂付近で起こった水蒸気爆発の火口跡、通称「熊落とし」を認定ガイドと共に巡る「アトサヌプリトレッキングツアー」は、第18回エコツーリズム大賞「環境省および（一社）日本エコツーリズム協会共催」を受賞している。問い合わせ先／摩周湖観光協会 ☎015-482-2200。3月下旬撮影。

文＝北室 かず子
写真＝田淵立幸

川湯温泉駅が近づくと、荒々しい岩山が忽然と現れた。山肌のいたるところから白い噴気がもうもうと上がっている。硫黄山、アイヌ名「アトサヌプリ（裸の山）」その名の通り、樹木が見えないこの活火山が、川湯温泉



川湯温泉駅にある足湯。ナトリウム-炭酸水素塩泉が、体を芯から温め、肌を滑らかにしてくれる。ホームを眺めながら至福の小休止を。温泉街へはバスで約12分。



駅舎には旧事務室と貴賓室を利用したレストラン「オーチャードグラス」がある。貴賓室のステンドグラスが美しい。駅前には人気のカフェ「森のホール」もある。



(左) ホーム側から見た川湯温泉駅と硫黄山。これほど活火山に近い駅が他にあらうか。蒸気機関車が走っていた当時も今も、景色は変わらない。写真提供＝摩周湖観光協会(右) 正面から見た川湯温泉駅。

の源だ。
硫黄山では約千五百カ所以上から噴気が上がり、レモンイエローの硫黄の結晶が山肌を染めていた。秋田県の玉川温泉がpH値約一・〇五、群馬県の草津温泉がpH値約二・一。川湯温泉はその間のpH値約一・七。国内屈指の強酸性で、なめるとレモンより酸っぱいことに驚いた。源泉の場所により多少違いがあるが、含硫黄・鉄―ナトリウム―硫酸塩・塩化物泉（硫化水素型）で、古い角質を溶かす作用があるそう。筆者は一泊で肌がすべすべ。そればかりか、よほど身体が奥が揺さぶられるようで、三泊もし



硫黄山の噴気孔で見られる昇華硫黄の針状結晶。

たら生まれ変われるのではないかと思うほどの爽快感を味わった。しかし優れた泉質だからこそ、施設管理の負担は大きい。阿寒摩周国立公園川湯地域運営協会 副会長の宮崎健一さんは「エアコンの室外機は硫化水素の空気にやられ、テレビは四年もてばいいほう。昔の車は部品が鉄なので錆びて腐食し、クラッチを踏んだら底が抜けたり、窓を開閉するレバーがもげたこともありました」と言う。

硫黄山では一八七六年（明治九）から昭和の時代まで硫黄の採掘が行われていた。安田善次郎が一八八七年（明治二十）に硫黄山から標茶に鉄道を敷いて米国から輸入した蒸気機関車を走らせ、標茶からは釧路川を舟で釧路港へ運んだ。硫黄は火薬などの原料として輸出され、重要な外貨獲得の手段となった。精錬や機関車の燃料として釧路の石炭採掘も本格化し、釧路港も整備された。硫黄山の硫黄が、釧路の産業を開いたのだ。安田が採掘事業から撤退した後、鉄道を北海道庁が買い取り、現・釧網本線の基盤となった。硫黄山から川

湯温泉駅までの線路跡は生活道として残り、木々が道を覆うことから「青葉トンネル」という散策路になっている。五月中旬、青葉トンネルには川湯の固有種、カワユエンレイソウが咲く。固有種誕生の背景には硫黄山の影響があるとも言われている。

五月下旬から硫黄山と温泉街の間に広がるつつじヶ原で開花を始めるのが、イソツツジだ。付近は酸性土壌で、噴煙には火山性ガスも含まれ、ふつうの植物が生育するのは困難だ。イソツツジはその厳しい環境に根を張り、百鈐に及ぶ日本最大級の大群落をつくりあげた。例年、六月中旬に花のピークを迎える。

そんな自然の奥深さを学べる施設が、阿寒摩周国立公園 川湯



1996年に発見された川湯地域の固有種、カワユエンレイソウ。オオバナノエンレイソウとミヤマエンレイソウの交雑種といわれている。写真提供＝川湯ビジターセンター

ビジターセンターだ。自然解説員の片瀬亜美さんによると、ここには



写真提供＝川湯ビジターセンター



写真提供＝宮崎健一

温泉街と硫黄山をつなぐ片道約2.6kmのつつじヶ原自然探勝路。写真提供＝宮崎健一





←厳しい環境に耐えられる植物だけが作り上げた生態系を説明してくれる片瀬さん。空撮写真の上が硫黄山、下が温泉街。



アカエゾマツのチップを、好きなスタンプを押したオリジナル袋に詰め、芳香蒸留水を吹きかけて作る、川湯ビジターセンターのユニークなお土産。500円。



川湯ビジターセンターの背後にはアカエゾマツの森がある。町内のアカエゾマツの枝葉から芳香蒸留水を抽出する蒸留を見ることができる(土曜、日曜に不定期で実施)。道内各地の樹木の精油も展示・販売。

●川湯ビジターセンター／弟子屈町川湯温泉2-2-6
☎015-483-4100。8:00～17:00(11月～3月は9:00～16:00)、水曜(祝日の場合は翌日)・年末年始休館。7月第3週～8月31日は無休。入館無料。



内装に木がふんだんに使われ、学びながらくつろげる川湯ビジターセンター。温泉水に浸けて1週間で半分に溶けた五寸釘の展示にはびっくり。

二つの不思議があるらしい。「二つ目は、温泉街から硫黄山へ高低差のない、つじヶ原自然探勝路を移動しているにもかかわらず、山を登るのと同じ垂直分布変化が見られることです。アカエゾマツ、イ

ソツジ、ハイマツの順に、硫黄山に近づくにつれて、より標高の高い過酷な環境に適応した植物へ移り変わっていくのです。二つ目は硫黄山から温泉街へ、温泉水が地下

ふつうは地下水が上で、温泉水は地下深くにあります。岩盤によって温泉水が下に染み込み、逆転現象が起きています」。温泉街ではたった二ヶ所掘れば源泉が噴出することもあるとか。活火山から岩盤を流れてくる鮮烈な湯。ああ、身も心もしびれてしまう。

よみがえる温泉川

前出の宮崎さんが属する阿寒摩

周国立公園川湯地域運営協会は、温泉街の土産物店や飲食店の事業者からなるボランティア団体で、川湯地域における国立公園の利用・保護に取り組んできた。なんと、四十三年も前からイソツツジの開

花期にガイドツアーを続けている。

「当初は団体旅行が主流で、お客様は夕方到着し、翌朝早く発つていかれました。せめてイソツツジの花期だけでも川湯を知っていたいただきたいと、団体旅行の出発に間に合うように朝六時から一時間のガイドツアーを始めました。今年も六月十日から行いますよ」。運営協会は、ゴミ拾いや草刈りなど美化

活動も長年、継続し、特に力を入れてきたのが温泉川の再生だ。温泉水の川が流れる温泉街は全国でも少ない。非常に貴重な存在にもかかわらず、地元では高度経済成長期に巨大化したホテル裏の用水路という認識しかなかった。「裏だつた川を、表にしたい」と清掃に精を出したが、倒産したホテルの廃パイプは所有者がいるので勝手に撤去できなかった。

そんな中で、二〇一六年、阿寒摩周国立公園が環境省の「国立公園満喫プロジェクト」の先行八地域に選ばれた。国立公園の保護と利用によって優れた自然を守り地域活性化を図るもので、背景には訪日外国人旅行者数を二〇三〇年



かつての温泉川。ホテルの裏を流れ、表に出る存在ではなかった。



温泉川の川底には強酸性の湯に耐える特殊な藻が生えているため、緑色に見えるようだ。地球創成期の生命もこんな環境で誕生したのかも。

（令和十二）までに六千万人とする政府目標があり、国立公園を世界水準のナショナルパークとしてブランド化する戦略がある。川湯温泉への来客数は一九九五年（平成七）の約六十万人をピークに、去年は約六万人。コロナ禍を考慮しても減少が著しい。弟子屈町観光商工課課長補佐の鶴田裕樹（つるたひろき）さんによると、「約二十軒あったホテルが倒産や廃業で半分以上になりました。

た。川湯温泉は泉質が優れているぶん、電化製品などの寿命が短く維持コストが高い。団体客を安く受け入れても設備投資に回せず、設備が老朽化し、お客様が離れる悪循環に陥ったと考えられます。廃屋のままでは危険ですし、温泉街の魅力も損なわれるため、廃屋を弟子屈町が取得し、解体・整備することになったのです。弟子屈町にとって大きな決断だった。

温泉川の廃パイプは、役場が所有者に許可を取り、宮崎さんらが根こそぎ取り除いた。さらに川に厚さ約二十センチも堆積していた砂利を浚（さ）うと、本来の岩盤が現れてきた。「テシカガはアイヌ語で『岩盤の上』を、カワユは『熱い川』を意味します。岩盤の上を流れる温泉川は、弟子屈町



（上）温泉川の砂利を浚う阿寒摩周国立公園川湯地域運営協会の皆さん。写真提供＝宮崎健一
（右）砂利が浚われ、岩盤が現れた温泉川。川の中にある数個の木箱はそれぞれが源泉で、各ホテルへ導かれる。



宮崎さんは川湯温泉で生まれ、28歳で札幌からUターン。ダーツバー「TANTO」を営んでいる。



川湯温泉そのものです。ぜひともお客様に見ていただきたいじゃないですか」と、宮崎さんらは手作業

温泉川の湯気が樹木を生む真冬の絶景。
写真提供＝宮崎健一



摩周湖観光協会では、4月から自治体や企業向けに温泉街再生策のモニターツアーを始めた。写真は温泉川をPRする一般向けモニターツアー。写真提供＝宮崎健一



で浚渫^{しんせつ}を続けた。川を流れているのは源泉と各宿でオーバーフローした分で、人が石罅^{いしげ}で身体を洗っ

持続可能な温泉街へ

た排水は別系統で処理されているので川には流れ込んでいない。廃パイプを撤去し、人力で膨大な砂を浚渫^{しんせつ}したことで川が蘇^{よみがえ}った。町は川に下りる階段と遊歩道、夜も歩けるよう照明を整備した。「地元の人が川を認識してくれるようになったことが一番うれしです。夢物語^{はなし}だけど、川を裸足^{はだし}で歩けるようになったらいいなあと思います」と宮崎さんは語る。

環境省のホテル誘致に星野リゾート^{リゾート}が応じ、昨年、地域、町、環境省に星野リゾートも加わって「阿寒摩周国立公園弟子屈町川湯



川湯神社の手水^{てみず}でみず、ちようず^{ちようず}も川湯温泉と同じく殺菌効果の高い強酸性の源泉。「この上ない手の清め方です」と宮崎さん。

温泉街まちづくりマスタープラン」が作られた。そのコンセプトは「湯の川がつむぐカルデラの森の温泉街」。中核をなすのは、温泉川だ。源泉を活用しながら温泉川に水着などが入浴できる「川湯広場」、兩岸の緑の中に東屋^{あずまや}などが点在する親水空間「川湯テラス」、川沿いに屋台が並ぶ「川湯横丁」などが整備される。二十年にわたる壮大な計画だ。まずは二〇二六年に予定される星野リゾートの「界^{かい}テシカガ」オープン時に「川湯広場」も完成したいと、町は意気込んでいる。鶴田さんいわく「高齢化が進み、人口が減り、後継者もない中で、町が持続していくために地域の人が幸せに暮らすための大きな投資です」。環境省が進める釧路から知床に至るロングトレッキングの中継地としても、キャンプから湯宿まで多様なニーズに対応するそうだ。

国立公園の第一級の自然と日本屈指の泉質を強みに、

サービスに見合う対価を得て、持続可能な温泉街へと生まれ変わる決意。川湯温泉では、地域への愛という岩盤の上を、極上の湯が流れ続けている。

①

「阿寒摩周国立公園弟子屈町川湯温泉街まちづくりマスタープラン」に描かれた川湯広場のイメージ。画像提供＝弟子屈町

